

「住民としての地方自治」の学習

福祉社会の実現を願って、総合的な学習の時間と横断的な扱いをした実践例

松本市立清水中学校 麻田正明

1 はじめに

学習指導要領で地方自治の学習内容は、「地方自治の基本的な考え方について理解させる。その際、地方公共団体の政治のしくみについて理解させるとともに、住民の権利や義務に関連させて、地方自治の発展に寄与しようとする住民としての自治意識の基礎を育てる」とし、取り扱いは「調査や見学などを通して具体的に理解させること」とされている。この学習においては、民主政治実践の場として地方自治制度があることを理解すること、地域に暮らす住民であることを自覚すること、より暮らしやすいまちづくりに主体的に参加していけるようになることを目標として学習を展開していくべきだと考える。

この単元で、地方自治の理念はもちろん、現状や抱える課題について学習していくには、話題に事欠かない。例えば長野県平谷村では、平成15年5月に行われた町村合併の可否にかかわる住民投票に、中学生が参加した。(表紙Ⅱに関連写真掲載) 賛否はあろうが、当事者となった生徒には、個人と社会の関わりを意識しながら、地方自治を学ぶ絶好の機会となったであろう。中学生対象の出前講座や模擬議会を実施したり、住民投票への参加年齢を引き下げたりしている自治体もみうけ

られる。

自分の住む地域の特色をより身近に感じながら、地域住民として地方自治に参加していく意識を実感できるようにするために、自治体と直接かかわることができる学習の展開が望ましい。

そこで体験や調査活動を組み入れていくことを考えるのだが、悩みの種は時間である。幸運にも本年度担任している3年生は、総合的な学習の学年テーマに「地域に学ぼう、地域に貢献しよう」を掲げ、その一場面として福祉教育に取り組んでいたこともあり、社会科とのクロスカリキュラムとして実践することにした。

同時に、地方自治の単元で福祉を窓口することによって学習指導要領(2)のイ「国民生活と福祉」の内容も組み込んで学習していくよう計画したものである。

2 授業の流れ

総合的な学習の展開では、生徒の主体的な流れを尊重しているため、単元のはじめから後述の展開がきちんと計画されていたわけでない。また今回の実践例は、学習の経過を見ながら、修正を加えつつ進行中のもので、本稿ではその経過を報告するものである。

2. ともに生きる社会に向かって

2. やつてみよう ~近所のお年寄りのお話を聞いてみましょう~

私たちが住む地域には、さまざまな人生の達人がいっぱいいます。東原郡の星田中学校では、そういう方々と交流する会をひらいています。先日、こんな交流がありました。

13歳のときから仕事をして、もう30歳をこえてしまいました。

「高松市で仕事を始めてから、いまでは高松市を知ることが多くなって、古いことを学んでいないことが多いですね。……」

義父から聞いたことばで忘れられないことばがあります。「ほめられたことは忘れ、人様から注意されたことは忘れない、どうしてかなと考えるから進歩がある。」

みなさんも、自分の仕事を通じて、人様に喜んでもらえるようになって下さい。

★ 西山さんのお話



★ 1 高齢者への感謝をつつるシルバーボランティア山田君!



★ 2 歩いて散歩する高齢者と行動するAさん(星田君)

星田は10歳で決心固から働き、そして高齢となり、10歳で友人を養育した。そしてつきつぎにおこなう自分の心身の健康維持に、東原は何回も星田の話を聞いたが、星田は昔ながらの石炭の手術を受け継ぎ的にリハビリを行い、ふたたび歩けるまで回復し病院から家に帰ることができた。

★ 3 歩けることとなく前向きに、具体的にチャレンジしていく。たいせつなものが見えるようになっていくことを星田の介護体験から学んだ。星田は変化にもなる身体的な成長をもちながら、

もせいでいい、生きることをめざし、高齢でもあきらめずに生きてまわろうとする意味や、思いはどのように動かすか手紙に伝えてくれたように思えた。

ケアをするがわ、されるがわ、という立場や役割をこえて、ひとりの人間としての思いの現実をありのままに受け止め、その事実を心から理解し、答の可能性を模索していくことから、相互ケアの経験を実感できると思った。どんな状況にあろうとも命をみつめた人と人の思いや手助けが、人間性や成長を気づかせてくれるのだと思った。

帝国書院『中学生の公民(最新版)』p.80~81

(1) 社会第一時「少子高齢化社会とは

少子高齢化社会の現状を資料から理解し、その課題について考える。

単元の導入として、少子化、高齢化の進行している現状をとらえ、どのような問題が発生しているかを話し合った。

(2) 総合①「ボランティア活動、福祉体験の計画をしよう」

自分たちでできる地域に貢献できることについて、学級で話し合い、やりたい活動を考える。

生徒の話し合いの結果、いろいろやってみたいが、まず福祉体験をしてみようということになった。小学校の時に体験したことがあった生徒がおり、車椅子体験、アイマスク体験の希望はすぐ出てきた。高齢者福祉についての意見が出たものの、福祉施設には行きたくないとの雰囲気が出てきたので、教師が疑似高齢者体験を入れることを提案し、三つの体験をすることが決定した。

(3) 総合②「高齢者のイメージは」

KJ法(注)の手法を用いて、高齢者のイメージについて考える。

福祉体験を依頼しながら、生徒の実態を福祉コーディネーターに相談して、アイデアをいただいた。生徒の実態調査と合わせながら実施した。高齢者に対する良いイメージより、悪いイメージの方が4割ほど多く、しかもストレートな言葉で表現されていた。

(4) 総合③「福祉体験をしよう」(2時間)

アイマスク体験、車椅子体験、疑似高齢者体験をしよう。

福祉コーディネーターをゲストティーチャーに迎え、講話と疑似体験を実施。全員が体験できるようにした。

(5) 社会第二時「福祉社会の実現のために」

身近な高齢者が活躍している例をあげながら、高齢者の知恵に学ぶ意義、社会参加の様子について話し合い、高齢者福祉の充実、共生社会について考える。

(6) 総合④「バリアフリーマップづくりをしよう」

(計画1時間、調査4時間、まとめ4時間 [うち

1時間は社会科])

グループごと車椅子を持って市内各所へ出かけ、バリアになっているもの、バリアフリー化されているものについて調査したり、公共機関で取材したりして、バリアフリーマップを作ろう。

学校周辺、市役所、松本城、JR松本駅、美術館、の他買い物客や観光客など人通りが多い駅周辺商店街、蔵の町などに分かれて、調査、取材を実施。都市計画図(25千分の1)を利用した。

どのようなバリアがあるのかについては予想以上のものを見つけることができた。

- ・新しく整備されたばかりの街路でも、雨水の排水のための傾斜で、車椅子は曲がっていつてしまい大変通行しにくかったこと。
- ・商店では高いレジ台、手が届かない自動販売機も大変気になること。…など

実際に車椅子やアイマスクをして歩いてみてはじめて実感した価値ある経験となった。

また、バリアフリー化を進めなくてはならないと考えている生徒たちにとって、文化財としての価値が優先される松本城では、バリアフリー化推進の難しさを聞くことができ、新しい視点になった。

(7) 総合⑤「高齢者福祉施設で交流をしよう」

疑似高齢者体験学習をふまえ、老人福祉施設でボランティア活動と交流をしよう。

近くの老人福祉施設へ出かけていき、窓ふき、草取りのボランティア活動を行った。施設の性格や入所者の状況から、そのような活動でも大変に喜んでいただけることがわかり、終わった後、気持ちが良かったとの感想も出てきた。

交流の時間では、話し方、聞き方、動作の速さなどを意識して対応することができた点、高齢者

(注) KJ法

川喜田二郎による創造性開発と問題解決の技法体系。今回は付箋紙を用いて、ラベルづくりからグルーピングまでを行った。



疑似体験がおおいにかされていた。

現時点で学習はここまでとなっている。今後は以下の内容で授業が展開する予定である。

(8) 社会第四時「まちづくりの提言をまとめよう」

各班で作ったバリアフリーマップや施設訪問の感想をもとに、福祉のまちづくりの提言にまとめよう

(9) 社会第五時「提言をしよう」

市役所交通安全課、福祉課の方をゲストティーチャーに招き、自分たちで考えた福祉のまちづくりを提案しながら、コメントや教えていただいたりすることを通して、主体的に地方政治に参加していく意義を考えよう。

(10) 社会第六時「地方自治の課題」

町村合併を題材に、地方自治への主体的な住民参加のあり方、財政、地方分権化について考えよう。

(11) 社会第七時 評価の時間

なお、社会保障制度については経済単元「家計から経済をみていこう」で、地方自治の組織については国家政治単元「国の政治を知ろう」でそれぞれ扱うようにしている。

総合的な学習の時間との関係で、社会科として連続した時間の単元として進行しているわけではないことを断っておく。



3 おわりに

評価規準は以下のように設定している。

社会的事象への関心・意欲・態度

身近な生活と政治への関わりに関心を持ち、住民のひとりとして現代の政治課題を意欲的に究明し、主権者としての自分のあり方について考えることができる。

社会的な思考・判断

地方自治の組織やしゅくみが直接民主制の手法を導入していることに着目し、地域住民としての積極的な政治参加の意味について考えることができる。

資料活用の技能・表現

少子高齢社会に関する資料を収集し、国や地方公共団体がとり組んでいる内容について、考察した過程をまとめることができる。バリアフリーの観点から、自分の住むまちの実情や課題について調査した内容を役所に提言することなど、さまざまな表現活動にとり組みながらまとめ、学習の成果として発信できる。

社会的事象についての知識・理解

住民の願いを反映させながら執り行われている地方自治のしくみについて、福祉についての具体的な事例を財政と関連づけながら考えることを通して地方分権の動きやまちづくりの重要性に気づく。

総合的な学習の時間との間で横断的な扱いをしているため、社会科としての目標を明確にしておくことが重要課題であり、この点から授業を評価しなくてはならないと考えている。

進行中である本実践は、単元全体の価値を評価検討するには至っていない。現時点までの学習の様子では、問題点をまとめて自分たちの意見を提言したいとの気持ちを表明している。また、普段の生活の中で、高齢者やさまざまな障害を持った方々への接し方を考えはじめ、声をかけたり手伝ったりするようにしたいとの声も出た。学習が始まった頃はひき気味であったボランティア活動であったが、積極的に参加したくなったという生徒も出てきている。国や自治体の施策をもっと詳しく調べてみたいと意欲を示している生徒もいる。

生徒の関心・意欲と意識の流れを尊重しながら、調査の結果を提言としてまとめ、自治体に発信することを通して、自分の住むまちをみる・意識することができる・作っていくことに参加していける市民として成長していくことを願うものである。